【複式】

自ら問題意識を持ち，かかわりを深めながら学び合う子どもの育成

～一人一人を大切にし，学ぶ喜びを実感する授業づくり～

1．「意味と内容」がひろがる複式学級の学び

子どもたちの真の学びの姿は，本校研究主題の②「意味と内容」に述べられているように，その子なりの見方，考え方、感じ方をもち，他者とのかかわりをもちながら粘り強く追究を続ける中で自己形成をしていく過程をさすものであると言える。

複式学級においては，少人数・異学年集団という特性が存在するが，子ども一人一人（個）を尊重し，子ども一人一人(個)の追究過程をみとっていく姿勢においては，単式学級と何ら変わりはない。少人数であるからこそ，個に寄り添い子どもの真の学びを支援することがより大事になってくる。個を育て，一人一人に自信や意欲をもたせることが子どもを真の学びに浸らせる道筋である。

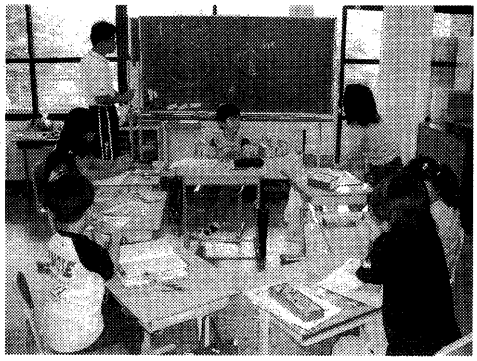
複式学級で学習する意味は，異学年・少人数集団における子ども相互のかかわりそのものである。８人から６人の子どもたちがかかわりあいながら学習を展開する。多くの場合指導者は，子どもの学習を見守り，学習のガイド役を子どもにゆだねるのであるから，子どもたちのかかわりの質が直接学習内容に反映される。つまり，子どもたちの集団においてコミニュケーションが円滑に行われ，互いの考えを認め合い，ある時には間違いを指摘されても素直に認められるような，支持的風土に基盤をおく学習文化をもとにした集団の形成が必要になる。そのために，指導者と子どもというかかわりよりもむしろ，子ども相互のかかわりの質を高めることが不可欠となる。子ども相互に真摯な態度と互いに尊重し合い共感しあう支持基盤を育てること,言い換えれば学び方としての子ども相互のかかわりの質を高めることが複式学級の意味をひろげることになると捉えたい。かかわりの質が高まることにより集団自体の意味も広がるとともに，集団を形成する一人一人（個）の意味もひろがることに繋がると考える。このように,複式学級では,学び方のよりよい変容を意味の広がりと捉えている。

複式学級で学習する内容は，子ども一人一人が自分なりのめあてを持ち，集団の中で刺激を受け合いながら自信を持って自己表現することである。子どもたちには個々にハードルの高さは違っていても耐えず乗り越えなくてはならない壁が存在する。それは学習におけるめあてと言ってもよいであろう。一人では越えられない壁も集団の中で切磋琢磨することや良い意味での競争により，乗り越えようと励むことができる。その時には，学習する意味で述べたようなかかわりの質が問われるのである。例えば，みんなの前でそれぞれの家庭で行った調理体験のプレゼンテイションを行う。小さな声で聞き取りにくくても，しっかり聞こうとする集団を前にして，消極的な子どももプレゼンテイションに自信を深める。さらに，発表した内容に対して，様々な質問や感想が出され，
それに答え続ける中で小さな自信の芽はさらに膨らみ，より大きな自信となって，みんなの前に出ることに対する緊張感がなくなり，プレゼンテイションをするということに対する壁

を乗り越えていく。このように，子どもは自信をつけながら自己表現を続けることになり，また他の子どもたちも，その姿を自分にとっての良い刺激ととらえ，意欲を喚起しながら学習を進めることができる。このように互いにかかわりながら自己表現をすることにより子どもは，よりよい学び方を身につけ，より主体的に学習に取り組むことができる。子どもが一つ一つの壁を乗り越えた時に自信や成就感・満足感を感じる。この歩みの過程が内容のひろがりととらえている。

つまり,子ども一人ひとりが学ぶ喜びを感じ,自信をもって学習に参加し,自己表現できるように励む姿を内容のひろがりとして捉えたいと考える。

2．複式学級でめざす子どもの姿



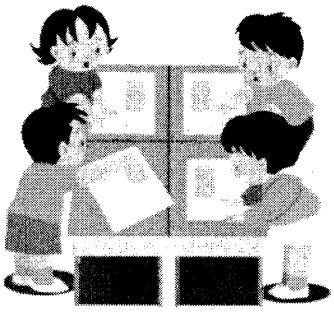
それぞれの教科において，子どもたちは課題に取り組んでいる。その課題は指導者が提示したものもあれば，子どもの思いから出たものもある。その課題について司会役の子どもが指名し子どもたちが次々と考えを述べていく。記録係の子どもが移動黒板にまとめていく。このような形態の学習が，国語や算数でよく実践される，直接指導・間接指導や同時間接指導の学習である。この時に一通り意見を出し合うと学習の終末を迎え，司会役の子どもがまとめて授業を終えることが少なくない。この場合においては，ただ一人一人の考えを出し合っただけであり，課題を追求していても，追究までは深まっていない。そこで，司会役を育て，話し合いを深化させたり，意見の発表者の表現力を高めなくてはならない。

学習の進め方・深め方の基礎

話し方・聞き方	司会者の進め方
・ 友達に聞こえる声で，最後まではっきりと話す。 ・ 友達の方を見ながら，順序を考えて話す。 ・ 友達の考えを受け止めながら，内容をしっかり聞き取る。 ・ 考え方が似ている点や異なる点を見つけながら，最後までよく聞く。 ・ 必要に応じてメモを取りながら聞く。	・みんなに公平に当てる。 ・同じ意見や違った意見を整理してまとめる。 ・話し合いの場で，考え方の理由や説明を引き出す。 ・わからない子や納得していない子に時間を十分にとって説明していくようにする。 ・ 質問や感想，アドバイスなどの多様なやりとりを考える。 ・ 学習の目標を踏まえ，計画的に進める。

例えば，話し合いが停滞した時，観点を再度確かめたり，意見の違いを整理したりしていくような積極的な司会者の役割意識を育てることや一人学習の時間を確保して，自分の考え

を整理させ，根拠をはっきりさせた話し方を身につけさせることが必要である。また，「○○君とちがって。」や「△△さんの考えと同じ。」のように，友達の意見と比べ話させる指導も大切になる。



このような話し方や司会役の役割は，学年を追って積み上げていくことが必要であり，時と場を捉えて，指導者が指導すべきことがらでもある。

発達段階の違う２学年が同じ教室で学習するという複式学級の特性は，子どもたちの思考を深め広げることにも繋がる。例えば，１年生が２年生のかけ算の学習を聞くことによりかけ算に興味をもち覚えようとする。また，本に親しんだ子どもは，２年生の教科書を１年先取りで読もうとする。また２年生は，１年前に学習した内容を２年生の思考で振り返り，より深まった復習の学習になる。このようなことは，指導者が意図して計画できるものばかりではない。知らず知らずのうちに互いに刺激し合い学んでいる姿である。同時同単元指導においても，上学年の思考に刺激され，下年年も深い考えを理解したり，下学年の活躍に触発されて上学年が，意欲を喚起される場合がある。

このように自己表現力や司会者の育成・異学年の良好なかかわりを基として，子どもの追求を追究へと深めていくことが大切である。

３．研究テーマ設定の理由

複式学級の特性には，異学年集団，少人数教育の二つがある。異学年が一つの教室で学ぶ利点は，教える側の教師と指導される側の子ども以外に，教えてくれる上学年の子ども，教えられる下学年の子どもが存在することである。こういった異学年のかかわりは，同学年の子どもには見られない譲り合いや思いやり，そして厳しさや責任の自覚などが存在する。また学年別の学習であっても，他学年や他者を意識した，個人の学習を展開することができ，自分たちで協同的に学習する場が常に設定されている。このような複式独自の子ども同士の主体的な学習の進め方と自己表現力を身につける過程で，子ども一人一人（個）にとっての学習の意味や内容をひろげていくことになる。こういった複式学級の特性を最大限に生かしながら，教育効果を高めていく授業のあり方を追究していきたいと考えた。

そして，研究主題に迫るために，学びの主体である子ども一人一人の気づきや疑問を大切にし，自己解決したり，話し合ったりする場で自分の考えを表現でき，学ぶ喜びを感じる子どもを育成していきたいと考えている。また少人数の利点を生かして，きめ細やかな支援をすることにより，一人一人を大切にできると考えている。

テーマをもとにした実践方針として「一人一人の気づきや疑問を大切にした課題を工夫する。」ことと「話し合い活動や体験活動を通して子どもに主体性や表現力を高める。」ことに取り組んでいきたいと考えている。

そのために，授業では，間接指導における学習リーダーが中心になって進められるような授業を積極的に行ったり，学年差を生かしたペア学習の充実を図る。また，指導者が子ども一人一人の学習課題を的確につかんだ上で，授業改善を行う。

テーマをもとに考えためざす子ども像は，下記の５点である。

① 明るく素直でやさいし子ども
② 自ら進んで課題に取り組む子ども
③ 協力し合って取り組み，「自分づくり・仲間づくり」をする子ども
④ 話をきちんと聞き，コミュニケーションによる練り合いによって共に高まろうとする子ども
⑤ 自分でやったという体験を通して，自信を持ち，自分の成長や向上に結びつけようとする子ども

研究テーマやめざす子ども像を踏まえながら，各学年や発達段階に応じた学び方を育てることは，意味や内容をひろげるという本校研究主題ともかかわって大切なことである。そこで，次のように各学級のめざす子ども像を設定している。

１・２年	授業中の学習ルールがわかり，元気よく学習に取り組むことができる子ども
３・４年	学習の進め方や仕方がわかり，意欲的に学習に取り組むことができる子ども
５・６年	自分から見通しを持って学習計画を立て，主体的に学習に取り組む子ども

4. 複式学級におけるまなざしの共有

まなざしの共有とは，二つの側面が考えられる。一つ目は，子ども同士のまなざしの共有である。これは，学習課題に子ども一人一人が真摯に向き合い納得したり，考えの違いを意識したりしながら，子ども個々の学習成果や人格をもとにして，磨き合う学習の場でめざしたい子どもの表情や雰囲気といったものである。このような場面を現出させるためには，子どもが表現したくてたまらないような切実感のある課題が必要なことは言うまでもない。そのためには，各教科の学習において大切にしなければならないことがある。まず，子どもの思いをもとにした単元を構成することである。低学年においては，子どもの様子やつぶやき等から，子どもの興味・関心を探り指導者の支援のもとに課題を設定しなくてはならない。高学年では，作文や日々の発言内容をもとに「A君の問題から今日の学習をはじめよう。」と個の考えから課題を設定することもできる。

また，磨き合う学習の前に自分の考えを整理するための一人学習の場も設定することが必要である。

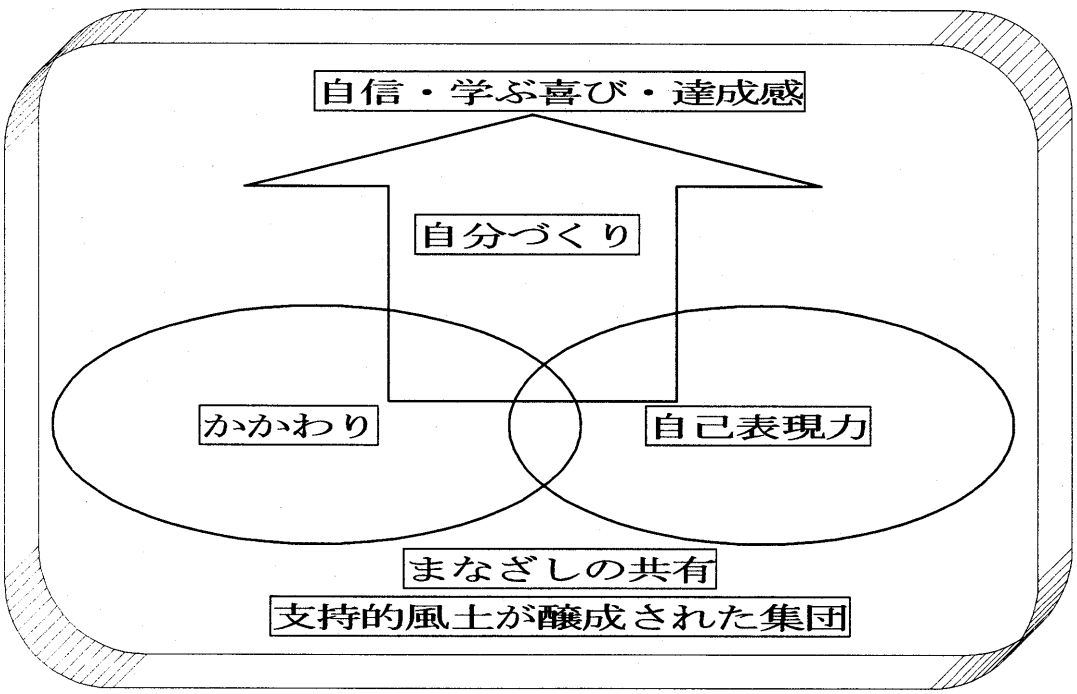
二つ目は，指導者と子どもとのまなざしの共有である。指導者が子どもの思いに寄り添い共感したり，時には故意に子どもの発言を揺さぶるような投げかけをして，子どもと同じ立場に立ったり，ともに学ぶ姿勢をもって授業に臨むことであると考えている。これらのことを複式教育の場にあてはめるとするとどうなるであろうか。

一人学習の充実や子ども個々の考えを大切にし，子どもの思いに寄り添って学習を展開することは同じである。しかし，指導者不在の間接指導の時間が多くなる複式の学習において

は，子ども同士のまなざしの共有のみで，指導者のまなざしがないことが少なくない。そのために，これまでに述べてきたような，自分たちで学習を進められる表現力やコミニュケーション力，さらに，学習を進めるポイントをにぎる司会役の育成が必要不可欠である。また，その基盤には，一人一人が大切にされ，厳しい中にも温かみのある集団の育成がある。

また，指導者の出番が限定されるために，間接指導後の指導者の出方や出る時期等も重要になってくる。

指導者が効果的に子どものまなざしの中に入っていくために，耐えず間接指導の様子を掴んでおくおくことも必要ではあるが，それは難しいことでもある。そこで，移動黒板に間接指導の足跡を記録させておくことにより，指導者も学習の流れを把握することができ，子どものまなざしの中に入りやすくなる。その場合に氏名マグネットを利用することにより，子ども個々の思いや考えを知ることもできる。さらに，間接指導に入る前の指導者の指示が大切である。簡潔に課題を子どもに伝え，一人学習や話し合い学習にスムーズに入れるように配慮しなければならない。



複式教育では，このように，子どもたちのかかわって高まろうとする態度や意識を大切にし，また一方では，そのための表現力を育成しながら，課題に挑戦し自分を高める自分づくりを追究していきたいと考えている。このことが，自信や学ぶ喜びに繋がり，子ども個々に成長することに他ならないと考えている。